

[論文]

# 「海図のない記憶の海」を彷徨って

マーク・トウェイン『自伝』の語り

有馬 容子

## Wandering Around in the “Uncharted Sea” of Recollection — Spoken Narrative in *Autobiography of Mark Twain* —

Yoko ARIMA

*Autobiography of Mark Twain, Volume 1* (the first of a projected three-volume edition) immediately became a bestseller when it was published by University of California Press in 2010. It indicates the fact that its narrative as well as its humor, is sufficiently capable of making the reader laugh even today.

However, as accumulated manuscripts of false starts show, Twain tried repeatedly to write his autobiography in vain for more than 30 years before he finally discovered the right way to do an autobiography. Namely, he discovered his preference for free-wheeling, spoken narrative and decided to experiment with dictation.

The disinhibiting nature of talk rid Twain of the obstacles that had been hindering him from writing. While, as Twain states, the narrative should flow “as flows the brook” following the law of narrative, or “apparently systemless system,” it was a difficult art with a pen in the hand. Also a free-wheeling way of talking, and accompanying digression was requisite for Twain’s humor. As he took to talking along starting at no par-

ticular time of his life, but rather wandering at his free will all over his life, the digression took him far and wide over “an uncharted sea of recollection,” and brought together widely separated things that were both past and present. The resulting surprises and contrasts formed a vital part of his humor.

Ursula K. Le Guin has stressed the importance of the rhythm which dislodges or unlocks the writer’s ideas and visions. By dictating his own *Autobiography*, Twain must have also found that rhythm that dislodged the mass of him hidden inside, which was tossing and boiling like “volcanic fires.”

Twain used the language that people naturally used when they talked, and selected from his life merely the common experiences which go to make up the life of the average people, being convinced that these episodes were of a sort which would interest people many years hence. The uncensored version of *Autobiography of Mark Twain* finally enables us to listen to and enjoy Twain’s authentic and unsuppressed voice, which is surely what Twain craved.

## はじめに

2010年、カリフォルニア大学出版局はThe Mark Twain Project（以下MTP）による新しい『自伝』完全版の第1巻（*Autobiography of Mark Twain*, Vol. 1、最終的に全3巻になる予定。以下新版『自伝』）を出版した。この新版『自伝』の画期的なことは、MTPが『自伝』として残されたマーク・トウェイン（Mark Twain）の原稿を徹底的に検証し、実験的に書かれた夥しい量の原稿の中からトウェインが本当に『自伝』に取り入れることを決めていたものを判別し、それを加えたうえで彼が望んだとおりの順番、つまり、1906年以降口述した順番どおりに復元することにはじめて成功したことである。その結果、トウェインは書き出しに失敗した原稿を未整理のまま残したのではなく、彼自身が原稿の山からどの原稿を取り入れるかを決めていただけでなく、1906年以降の口述をどのような形で終わらせるかに至るまで整然と決めていたことが明らかになった。

これまでに、その一部を生前に出版した *North American Review* 版<sup>①</sup>、トウエインの死後公認の伝記執筆者アルバート・ビゲロー・ペイン (Albert Bigelow Paine) が編集して出版したペイン版 (*Mark Twain's Autobiography*, 1924)、ペインが含まなかった原稿をバーナード・デヴォート (Bernard DeVoto) が編集して出版したデヴォート版 (*Mark Twain in Eruption*, 1940)、口述された順番ではなくエピソードを区切って時系列的に編集し直したチャールズ・ナイダー (Charles Neider) のナイダー版 (*The Autobiography of Mark Twain*, 1959) があり、今回の新版『自伝』の内容自体はすべてが未公開であったわけではない。しかし、これまでの版はそれぞれの編集者が内容をエピソードごとに分断してそれぞれの価値基準に従って再編集したものであり、トウエインが望んだとおりの順番で編集されることがなかった (Smith 3-5)。それはひとつには残された膨大な原稿をトウエインが系統立てることなしに未完で残した、雑ばくな原稿の山であるかのように誤解していたからである。

1906年1月から1日2時間のペースで開始された口述は、はじめの頃はほぼ毎日行われ、原稿に起こすとその量は膨大なものになった。それをトウエインが語ったそのままの順番で再現することにどれだけの意味があるのか、ナイダー版『自伝』のように整理し、時系列に並べ変えたほうがよいという意見もある (渡辺 14-23)。しかし、実際に新版『自伝』を読むと、果たしてそうだろうかという疑問が湧いてくる。内容的にはすでに出版されている版に含まれていて馴染みのあるエピソードもかなり含まれているのにもかかわらず、新たな発見も少なくない。どの版よりもユーモラスである。何よりも1906年以降のトウエインが、そこに存在して毎日語ってくれているような現実観があり、百数年前の口述とは思えないほど身近な感じもする。そもそもナイダー版『自伝』を読んでいたのではトウエインが残そうと望んだ『自伝』の口述のほぼすべてが、最晩年の1906年以降であったことさえ明確にはわからない。これだけ印象が違うということはこれまで編集されてきた『自伝』で大事な部分が少ないから切り落とされていたのではないかと疑っても不思議はないだ

ろう。

本稿ではまずトウェインが口述という手段にこだわったのはどうしてかを確認し、それが順番どおりに再現されることによってどのような効果が発揮されるのか、既刊の第1巻からわかる範囲で具体的に検討し、その意味を考察したい。

## 1. 蓄積した記憶を放出させるリズム

トウェインが『自伝』を書き始めたのは、友人で当時国務長官であったジョン・ヘイ (John Hay) に勧められたからであり、次のような経緯があった (*Autobiography of Mark Twain* 223-24)。口述ならではの妙を示すためにも、あえてトウェインが語りながら組み込んだ細部の描写を入れて説明する。

それはヘイが40才、トウェインが42才のときで彼がトウェインに言ったことは大まかに次のようなことであった。人間というのは40才で人生の頂点に上り詰め、その後終末の方向へ下降し始める。普通の人間は、厳密には言わないが大体平均的な人間というのは、その年齢までに自分の人生が成功だったか失敗だったか結果が出ている。どちらにせよ、記録に値するだけの人生を終わらせているし、どちらにせよ、生きてきた人生は書き留めるに値している。そう言うと彼はトウェインに『自伝』を書き始めたか、もう2年も失ってしまったからすぐに始めなくては、と発破をかけたのである。

トウェインはヘイが自分たち2人を平均的な人間の部類に入れたことには怒りを覚えなかったが、多少なりとも心が傷つけられた。彼は失った2年間を取り戻そうと、ただちに『自伝』の執筆にとりかかった。ところがいつものことながら、なかなか順調に筆が進まない。1週間で決意は消え、書き始めた原稿は全部捨ててしまった。それから、3年か4年ごとにまた新しく書き始めては捨てる、ということが続いた。書き留めた内容を『自伝』に使えたらと思って日記を書いたこともあったが、1週間

しかもたなかった。この8年から10年のあいだに再び『自伝』を書いてみようとしたこともあったが満足のいくものではなかった。いつもの駄目な感じのトウエインがありありと語られ、じわじわと可笑しさがこみ上げてくる。あとで述べるがトウエインの口述は、このユーモラスな気分<sup>ナラティブ</sup>に達しているとき最高潮になる。

そのあと、トウエインは口述にこだわった理由について核心に触れる内容を比喩的に説明しだすのである。彼は、ペンで書くと文語調すぎてしまう。ペンを握っていると物語を創作するのは難しい。それは執筆の速さがナラティブに合っていないからだ、と説明する。ナラティブというのは、小川が山を流れ落ちるようにさらさらと流れなければならない。ところが、ペンを握って書いているとその流れの速さは運河の流れのように「ゆっくりと、なめらかに、礼儀正しく、眠たげで (slowly, smoothly, decorously, sleepily)」、「上品で、整いすぎている (too prim, too nice)」。その進み方やスタイルはナラティブに合っていないのだ。

ペンで書く速さがナラティブに合っていないとすれば、どういうテンポが適切なのだろう。本格的に『自伝』の口述を始める2年前、トウエインはその面白さをウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells) に以下のように興奮気味に語っている。

I've struck it! And I will give it away—to you. You will never know how much enjoyment you have lost until you get to dictating your autobiography; then you will realize, with a pang, that you might have been doing it all your life if you had only had the luck to think of it. And you will be astonished (& charmed) to see *how like talk it is, & how real it sounds, & how well & compactly & sequentially it constructs itself, & what a dewy & breezy & woodsy freshness it has...* (MTHL II 778 強調筆者)。

口述したときの音や無駄のない構成、そして全体としてその清々しさに感動している様子が伝わってくる。新版『自伝』の編集長ハリエット・エリノア・スミス (Harriet Elinor Smith) がその序文で指摘しているようにこの頃からペンによる制約を解消するには口述という手段が最も

有効であることを発見していたと考えられる (20-21)。

実際、清々しく流れるテンポを獲得するとトウエインの想像力は活性化され、内容が勢いよく飛び出してくることがあったようである。ナイダー版『自伝』第58章(1906年以降に口述された。新版『自伝』第1巻には未所収)には、いざ口を開けば、語りたい内容が飛び出してくる、言葉が追いつかない様子が語られている。それは同時に20もの異なった方向から、押し寄せてきて、しばらくはこの「ナイアガラの滝の大波」に吞まれ、水中に沈んで、息をすることすらできなくなったという(372)。1905年頃のトウエイン自身を代弁していると考えられる『人間とは何か』(*What is Man?* 1906)の老人も強く感動するようなものにぶつかったとき、口を開いて言葉にすると、心が<sup>マインド</sup>注意を集中させ、人間が意識しないのに言葉が飛びだしてくる様子を語っている(182)。

ということは、つまり膨大な知識や過去の記憶といったものがトウエインの内面に蓄積されていて、彼が外に出す方法さえみつければ、凄まじい勢いで飛び出してくる状態であったということであろう。彼は新版『自伝』の最終的な形が固まってからの口述の部分に3種類の序文を書いていたが、その中のひとつ“The Final (and Right) Plan”は次のような言葉からはじまる。“What a wee little part of a person’s life are his acts and his words!”(人間の行動と言葉は人生のなんとわずかな部分でしかないことか!)。続けて、人生の本当の中身は頭の中にあるのであって、その人間にしかわからない。頭の中の工場は常に稼働していて、彼の考えたことが彼の歴史であり、言葉や行動は彼の世界の薄い外皮でしかないと述べる。そして大部分は隠れていて、昼夜休まず煮えたぎる溶岩のように活動しているのであるから、そのエネルギーに活動する膨大な量の中身を書けば1日8万語の本1冊、1年で365冊になるほどの量になり、とても書き尽くせるものではない。『自伝』はその人間の着ている服やボタンにしかずぎないと表現している。

ペンで書いていたのではとても追いつかないほどの、隠れた膨大な知識を外に出す方法が、口述だったと言えるだろう。『自伝』はこの口述と

いう方法の発見によりやっと順調に開始されたわけだが、それにより口火を切られた想像力のほとぼしりは他の創作活動にも影響を及ぼしていることは見逃せない。1905年から1906年頃の執筆活動をざっとみると、妻のオリヴィアが亡くなった翌年であるにもかかわらず、この短期間にトウェインは彼自身の衰弱していく体力を考えれば驚くほどの集中力でさまざまな作品の執筆にあたっている。1905年の4月には「落伍者の避け所」(“The Refuge of the Derelicts”、以下「落伍者」)を断続的に執筆、5月20日から6月23日の約1ヵ月で現存の『細菌ハックの冒険』(“Three Thousand Years Among the Microbes”)の原稿をすべて執筆し、その直後6月末から1ヵ月ほど、『ミステリアス・ストレンジャー44号』(“The Mysterious Stranger, No. 44”)の修正にとりかかり、1905年の半ばから1906年の初めの数ヵ月の間には「ストームフィールド船長の天国訪問記」(“Captain Stormfield’s Visit to Heaven”)の30年も前の原稿を読み直し、“A Journey to the Asterisk”を含む“Captain Stormfield Resumes”(第5章)と“From Captain Stormfield’s Reminiscences”(第6章)およびはしがきを加えている(1907年に出版されたときには含まれなかった)。1906年の7月には「イヴの日記」(“Eve’s Diary”)を執筆し、すでに書かれていた「アダムの日記」(“Adam’s Diary”)に修正を加え、その後10月までに魂についての議論を含む『人間とは何か』第6章の「困難な問題」を加え“Interpreting the Deity”と“A Horse’s Tale”を書いた。その間、『自伝』の口述をし(神に関する内容を多く含む)、1906年の6月頃「落伍者」を断続的に執筆しているのである(*Fables of Man 12-14, The Bible According to Mark Twain 135*)。

作家は往々にして自分の内面にぎっしり詰まっているアイデアやヴィジョンを外に出すのに苦勞するようである。アーシュラ・K・ル＝グウィン(Ursula K. Le Guin)はヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)が友人のヴィタ・サックヴィル＝ウエスト(Vita Sackville-West)に出した手紙の以下の部分を引用してこのことに触れている。ウエストは「適切な言葉」を見つけることにこだわって文体について苦悩していた。ウルフは以下のように書いている。

...here am I sitting after half the morning, crammed with ideas, and visions, and so on, and can't dislodge them, for lack of the right rhythm. Now this is very profound, what rhythm is, and goes far deeper than words. A sight, an emotion, creates this wave in the mind, long before it makes words to fit it...

ウルフは適切な言葉を探すより、正しいリズムをつかむことの方が大事なのだと言っているのである。彼女はその午前中、アイデアもヴィジョンも頭にいっぱい詰まっているのに「正しいリズムがつかめなからそれを外に出すことができなかった」のであり、そのリズムとは言葉よりはるかに深いところにあり、ある光景や感情はそれにふさわしい言葉を作り出すより前にこの波を作るのだと書いている。ル・グウィンにはこれにさらに自分の考えを加え、記憶と経験よりさらに深いところに、想像力と創作よりさらに深いところにリズムがあって、記憶と想像力と言葉はみな、このリズムに合わせて動いていくのだとしている。そして作家の仕事は、「さらに深く潜っていき、そのリズムを感じ、見つけ、そのリズムに合わせて動き、それに動かされて、そのリズムが記憶と想像力を動かして言葉を探しあてるようにさせること」だと述べている (“The question I get asked most often” 280-282)。

『自伝』の方法に苦悩するトウェインの様子を知れば知るほど、新版『自伝』で彼の語りのリズムに触れれば触れるほど、『自伝』の口述は彼にとって正しいリズムをもたらしてくれるものであったのではないかと思えてくる。

## 2. 海図のない航路に行く——システムのないシステム

それではトウェインの口述のリズムとは、実際にどのようなものだったのだろうか。まずトウェイン自身の説明から探してみよう。彼は新版『自伝』の最初のページの序文 “An Early Attempt” で、『自伝』が長続きしなかったもうひとつの大きな理由を以下のように述べている。これは

ヒントになるだろう。

This is not to be wondered at, for its plan is the old, old, old unflexible and difficult one—the plan that starts you at the cradle and drives you straight for the grave, with no side excursions permitted on the way. Whereas the side-excursions are the life of our life-voyage, and should be, also, of its history (203).

トウエインはここで通常の『自伝』のように、揺りかごから墓場までまっしぐらに書くという方法は、脇道にそれることを許さない柔軟性に欠くものだから長続きしなかったと言っている。道草を食うことは人生という旅の原動力であるし、人間の歴史に活力を与えるものでもあるのに、と不満気でもある。彼にとってこの脇道にそれるということは大事な要素だった。

さらに、新版『自伝』の最終版に対する3つの序文のひとつ“The Latest Attempt”では、この脇道にそれるということが、口述にどのように反映されるのか具体的に述べている。

Finally, in Florence in 1904, I hit upon the right way to do an Autobiography: start it at no particular time of your life; wander at your free will all over your life; talk only about the thing which interests you for the moment; drop it the moment its interest threatens to pale, and turn your talk upon the new and more interesting thing that has intruded itself into your mind meantime (220).

『自伝』を口述する正しい方法としてトウエインが語っているのは、特に自分の人生のどの部分を語るかは決めず、自由にあちらこちら彷徨いながら語ることであり、そのとき興味をもったことのみを話し、興味が薄れればあっさり次の話題に移ってしまうという方法である。そのまま文章に起こせば、途方もなく冗漫なものになりかねない印象を与えるが、彼は時系列的に語ることは決してせず、この方法で『自伝』の口述を続けた。

この方法についてハウエルズには次のように説明している（1906年3月

25日の口述)。

... its apparently systemless system—only apparently systemless, for it is not that. It is a deliberate system. *It is a system which follows no charted course and is not going to follow any such course.* It is a system which is a complete and purposed jumble (441 強調筆者)。

見たところではシステムがないようだが、「海図にある航路」を進まないというだけで、歴としたシステムであることを強調している。具体的に想像するのは難しいが、たとえばこれはトウェインがネバダ州ジャックラス峡谷で暮らしたときの友人ジム・ギリス (Jim Gillis) の語りと非常に類似しているように思われる。ジムは豊かな想像力を持ち、即興で話を作り出す天性のユーモリストであった。彼はインスピレーションを得て語り出すと自然に展開するのに任せ、どのような方向に発展するのか、どのような形で終わるのか、などといったことは一向に気にしなかった。そのくせ話の組み立ては実に巧妙だったという (ナイダー版『自伝』27章)。しかし、これまでの『自伝』では、ナイダー版『自伝』のようにエピソードごとに切断され、その話題に至るまでの連想の詳細はほとんど余計なものとして削除されてしまっていた。したがって、実際にはどのような語りであったか全貌を把握することができなかつたと言えよう。新版『自伝』第1巻が出版されたおかげで我々は、はじめてその語りに触れることができるわけである。

ここで改めて、トウェインの膨大な記憶を呼び覚ますリズムを具体的に検討してみたい。ここでは特に、トウェインの生涯の友ジョセフ・ホプキンス・トウィッチェル (Joseph Hopkins Twichell) に関する記述に焦点を当て、辿ることにする。新版『自伝』は既刊がまだ1巻のみだが、他の『自伝』、特にナイダー版『自伝』よりはるかにトウィッチェルに関する記述が多く、他の版にない特徴を把握するには適切な題材と思われるからである<sup>(2)</sup>。

トウィッチェルは聖職者でありながら、生涯キリスト教を信じることのなかったトウェインの掛け替えのない友であった。その交友は1868年

に知り合ってからトウェインが死ぬまで40年以上続いた。新版『自伝』では話の展開の節々でトウィッチェルが登場し、トウェインの言う「次の話題となる新たな興味 (the new and more interesting thing)」をもたらす役目を果たしている。不運の役者ジョン・マロン (John Malone) が亡くなったことも、結婚以来のクレメンス家の御者であったパトリック (Patrick) の臨終の知らせをもってくるのも彼である。そして、そういった悲しいことがあるとなおさらふざけたくなる性格の持ち主だったトウェインは、決まってトウィッチェルのことを話題にしたがった。彼はトウィッチェルのことを話題にするとユーモラスな気分になり替わるようだった。そしてそれはいつも大きな笑いを誘う途方もなく可笑しい種類のものになった。トウェインは語っているうちにふざけたい気分になり、別の話題に移る途中で、「トウィッチェル、トウィッチェル」と言いかけることがある。彼は道草を食いながら興味のあるものからより面白いものへと変化して語るトウェインの口述のリズムを形成する格好の道具だったのである。

新版『自伝』は日記の形式をとっているので1906年以降のニューヨークにおける口述の日々、トウィッチェルはトウェインの極めて身近に存在し、彼と度々出かけ、行動を共にしていることがわかる。しかも、トウェインの“systemless system”が再現されているためだと思われるが、その一見余計なものに思われる細部は未整理の無駄な情報という印象を与えどころか、不思議にも効果的にユーモアを生み出している。毎日2時間の口述を文字どおりそのまま起こしたのでは、決してこのように整然とまとまることはない。トウェインがいかに気取らない簡潔なスタイルにこだわった作家であったかを忘れてはいけない。一見無駄な遊びのように思える描写も、ユーモアを活かすために計算された最小限の表現なのである。

語りの面白さは説明するよりも具体的にみるべきだろう。少し長くなるが、トウィッチェルに関連した部分を、その内容に沿って大まかに紹介する。以下はトウェインが、マロンが亡くなったことを知った後に続

いて口述した部分である。無駄にみえる細部も、原文ではリズムの一部として大事な役目を果たしているのだから、あえて含めることにする。

その前の晩トウェインはトウィッチェルと一緒にシッケルズ (Daniel Sickles) 将軍を訪問していた。シッケルズ将軍は南北戦争中トウィッチェルが従軍牧師として所属していた大部隊を率いていた。トウェインは彼に1度か2度しか会ったことがないのに、トウィッチェルとつき合った年数分 (38年か39年間) 知り合いだったような気がしていたというから、トウィッチェルがいかにこの将軍のことを好んで話していたかがわかる。ところがトウェインにとってはどうも好みの人物ではないらしい。彼は、シッケルズ将軍のスピーチのつまらなさを婉曲的に、しかし立て続けに指摘してみる。要点はぎっしり詰まっているのだが、活気がないというか単調というか、じきに眠くなってしまう。自分も、トウィッチェルに1度や2度足を踏みつけられた。ビル・ナイ (Bill Nye : 当時人気のあった文学的コメディアンのみ) もワグナーの音楽の方がいいと誰かから聞いたと言っていた、と。しかし、それ以上は奥歯に物の挟まったような話し方しかできない。しかも、将軍は本来ならばトウェインが思いっきり皮肉りたくなるような虚栄心の強い人間でもあるらしいのだ。彼は自分の戦争で失った足のことをひととき大事に思っており、死ぬ直前に自分が立派に見える名言を残すことにひどく執着している。しかし、トウェインとしては世の中から、特にトウィッチェルから立派な軍人として尊敬されている人物だけに、たとえ存命中に出版する予定のない『自伝』の口述であっても批判がましいことはおくびにも出せないのだ。

このようなシッケルズ将軍の話もトウィッチェルがかかわっていることでほほえましいユーモアに変化する。トウィッチェルは心から将軍を敬愛している。将軍が亡くなったという誤報を自分の司る日曜礼拝の直前にもらった彼は、気が動顛してもはや感情が抑えられない。会衆は普段は沈着冷静な彼がさほど感動的でもない章を読みながら、声を詰まらせ涙を流している様子にただならぬ異様さを感じる。

しかし、ユーモアが全開になるのは、次に続く口述だ。このエピソード

ドを語っているあいだに、トウェインはすっかり楽しい気分になったらしい。トウィッチェルというのは本当に面白い経験をたくさんしているんだ、と語り出すとあまり面白くないシクルズ将軍のことなど、どうでもよくなってしまふ。

それはある土曜日の晩の出来事ということになっている。日曜日には礼拝があるので、聖職者のトウィッチェルには、取り返しのつかないことがあってはならない日だ。彼は妻の洋服ダンスのところに珍しいビンを見つけて、それが育毛剤だと勘違いする。勝手に自分の部屋に持って行って、たっぷり髪の毛にしみこませたあとすっかり忘れてしまった。ところが次の日、それが彼の髪を輝くばかりのグリーンに染めてしまったことが判明する。あわてて代わりの牧師を探すがみつからない。結局自分が説教することになるが、彼は軽い内容の説教をまったく持ち合わせていなかった。しかたなく、いつものとても深刻な、厳粛な説教をせざるをえなかった。

悪いことに、その説教の厳粛さと髪の毛の「<sup>ゲイユテイ</sup>賑やかさ」はまったく調和していなかった。説教を聞いていた人たちはハンカチを口に押しつけて必死になって笑いをこらえていた。ところが、当のトウィッチェルは満更でもない様子なのである。彼が言うのには教会に集まった人たちの「全員」が、この全員という言葉**を強調して言ったのだが**、始めから終わりまで、いままで見たことがないほど熱心に彼の説教を聞いていた。いつもなら多少は関心がなさそうであったり、意識がどこかにそれていたりという感じがあったが、今回はそんなのではない。そこに座っていた人たちは全員が、これは「今日ここに集まった人たちのためだけのショウなんだ。すべてものにしなくては。少しも無駄にしてはいけない」と思っているようだった、とトウィッチェルは言うのである。さらに、説教壇から降りてくると、かつてないほどの数の人たちが彼に握手を求め、説教を褒め称えるために待っていたと言うのである。

トウェインは会衆が説教に興味をもったのではなく、彼の髪の毛をもっと近くで見ただけだということを知っていたから、こんな偽り

の行為が教会の中で起こったなんて残念だと言う。その後どうなったかという、今度はトウエインの説明によれば、毎週日曜日がくるたびにトウィッチェルの髪の毛への関心はますます高まっていった。というのは彼の髪は単なる「単調に」グリーンだったのではなく、濃いグリーンになったり、赤みを帯びたり、紫っぽく、黄色っぽく、青っぽくという風に多種多様に変化し、いつも魅惑的なまだらだったからだ。そして毎週その前の週の日曜よりも「ちょっと面白かった」。おかげで彼は有名になってニューヨークやボストン、サウスカロライナ、それに日本からも人々が見にくるようになった。彼の髪の毛が魅惑的に変化しているあいだは、教会の席も空席無しという状態だった。トウエインはおかげでたくさんの人たちがショーを見るために教会に加わり、ビジネス面で停滞気味だった教会を繁栄させるきっかけになったと結んでいる。

心の底ではあまり面白くないと思っているシッケルズ将軍のことを語りながら、トウィッチェルの突拍子もない経験のことがひらめいたときのトウエインの嬉しそうな顔が浮かび上がってくるようである。彼は別のところで『自伝』の口述の醍醐味を次のように語っている。

... here we have diary and history combined; because as soon as I wander from the present text — the thought of to-day — that digression takes me far and wide over *an uncharted sea of recollection*... The privilege of beginning every day in the diary form is a valuable one. I may even use a larger word, and say it is a precious one, for it brings together widely separated things that are in a manner related to each other and consequently pleasant surprises and contrasts are pretty sure to result every now and then (283 強調筆者).

『自伝』を日記と過去の記憶とを組み合わせさせた形にした理由について語っている部分であるが、それはいま考えていることを語っていて、脇道にそれると遙か遠く「海図なき記憶の海」に彷徨い出ることになり、「ひどく離れていた記憶がいわばどこかでつながっていて」、「嬉しい驚き」やいま語っていることとのコントラストが生じることになるからだと言

っている。トウィッチェルの話を思い出したときのトウェインの嬉しさはまさにこの「海図なき記憶の海」での航海で思いがけなく見つけたものの驚きとそれがいま語っていることとのあいだに生じさせる嬉しいコントラストによるものだったのだろう。

新版『自伝』の大きな目的は通常の『自伝』のように時系列的に語るのではなく、話し始めた話題の興味が薄れたら他のことに話題を移して語り続けるという、一見冗漫な語りがいかに読者を楽しませるものであるかを実践し、その楽しさを紙に定着させることだったのではないだろうか。トウェインがそれを歴とした“system”だと言い張るだけあって、このトウィッチェルのエピソードを例にとってみても、ユーモアを最大限に活かした無駄のない構成であることがわかるのである。

悲しさを誘うパトリックの葬式の後にも、戦没者慰霊の厳粛な場を司るトウィッチェルと式典に疲れ果てた軍人たちとの対照を描くユーモラスな場面が語られる。しかし、「海図のない記憶の海」に出航し、現在の文脈と過去の出来事がつながるとき、それは思い出したくない過去の悲しい記憶であることもあった。パトリックの死は亡くなった最愛の娘スージー (Susy) の思い出につながり、トウェインは古い原稿の中からスージーの書いた、「父トウェイン伝」に関連する記述を見つけることになる。それ以降130ページほども、それに基づいて呼び起こされた記憶が語られることになるのだ。トウェインは1896年に亡くなったこの娘にまつわる悲しい記憶を、一時は無害化して忘れることに必死になった。夢と現実の区別がわからなくなる、いわゆる一連の「夢の作品」の中で悪夢から覚めるプロットを書き続けたのもそのひとつである。1906年になってやっと彼女の記憶をユーモアを交えて語るができるようになったのだろう。しかし、それも口述しながら記憶の海を彷徨って思いがけない巡り合わせで浮かび上がってきたものであり、決まった航路を行くように時系列的に語っていたのでは、決して日の目を見ることはなかったかもしれない内容なのだ。このような繊細なトウェインの心の糸をすべて切り離してしまったこれまでの『自伝』が、多くを失っていたことは否

めない事実だろう。

### 3. モリス事件

没後100年で出版された新版『自伝』は1年で販売部数50万部に迫るベストセラーになったが、それは当然のことながら現代の読者をも引きつける面白い内容であったからに他ならない。時代を超える作品を残すためにトウェインは、長年の試行錯誤の結果磨き抜いた技を身につけていた。そのためには文体や内容についてどのように工夫すべきかについても『自伝』の中で詳しく語っていたのである。しかし、すでに述べたように、これまでの『自伝』はそれぞれの編集者の価値基準に従い、削除された部分があるために、肝心な部分が抜け落ちていることも多く、時代を超える作品の妙にかかわる大事な部分についても例外ではなかった。

たとえば、当時しばらくのあいだ新聞を賑わし続けていたモリス事件 (Morris incident) もそういった例のひとつである。ナイダー版『自伝』ではみごとにそのすべてが削除されてしまっている。しかし、トウェインは新版『自伝』で他のことを語りながらも50ページほどその事件から意識を逸らせないでおり、それは明らかに『自伝』口述中の彼を触発する興味深い事件であった。

この事件は、簡単に説明すれば次のような事件であった。教養も身分もあり気品のあるモリス婦人が夫の公職からの解雇を不当とし、調査を願い出たものの埒が開かず、当時の大統領セオドア・ローズベルト (Theodore Roosevelt) に面会を求めたことに端を発する。大統領の私設秘書バーズ (Barnes) が頑として取り次がず、静かにいつまでも待つことを主張した婦人としてしばらく押し問答した結果、バーズは警備の警官に指示し、力づくでホワイトハウスから数ブロック先の警察署まで彼女を運び出し、精神異常行為として罰金を科した。婦人はショックと怒りから心身ともに障害を受け入院する事態となった。しかし、彼女はあくま

でも冷静であり、落ち着いた巧みな言葉遣いからも彼女が精神異常ではないことは、誰からも明らかであった。

トウェインはこの事件がいかに取るに足りないものであるかを混乱の19世紀末から20世紀初期のアメリカにおける内外の大問題と対比させて目立たそうとしている。当時ロシアではすでに革命の兆しがあった。中国では大きな動乱が差し迫っていることを予見させる不穏な動きがあり、そのためにアメリカはアギナルド (Emilio Aguinaldo) 将軍を卑劣な方法で捕らえたファンストン (Frederick Funston) 将軍の指揮のもとにフィリピンから連隊を動員していた。トウェインがそれぞれの問題はそれだけで充分なスペースを占めるに値する事件であるのにもかかわらず、そこにこのモリス事件が割り込んですべてかき消してしまっていると嘆いていることは確かである。自分の『自伝』がいつ出版されるか知らないが、そのとき国民がこのモリス事件を読んで思い出そうとしても思い出せないだろうと言って、散々虚仮こけにしている様子でもある。

ところが、トウェインのポイントは実は他のところにある。内容はともかく、当時、このつまらぬ事件についてアメリカ中の人たちが腹を立て躍起になって議論しており、彼はその事件がそれだけ皆の関心を引きつけ、感情を煽り立てているというその事実に強い興味を持っていた。そしてこういったものこそ『自伝』にもってこいの題材なのだ、と言う。確かに、時間が経てば何の価値もなくなる事件だ。しかし、人生とは大きな事件ばかりではなく、つまらないこともたくさん詰まっているものだ。些細な出来事だからといってそれらを削除してしまっている『自伝』は人生の本来の形を映しだしていない、「人生というのはそういった大小の出来事にぶら下がっている人間の感情や興味からなっているのだ」と言うのである (258-59)。

モリス事件について語る少し前の部分で (1906年1月10日の口述)、トウェインは人生とは現実と実際に起こる事件からなっているのではなく、そのほとんどが「頭ヘッドの中に永遠に嵐のように渦巻いている思考からなっているのだ」(256)と語っている。すでに述べたように1906年の口述の

時期、トウェインは人間の現実を決してむき出しの針金のような事実の羅列ではなく、実は人間の頭の中にあるさまざまな思考を<sup>かたど</sup>模っているのが人生だという考えを持つようになっていた(6ページ参照)。

このように人間の心の動きに強い関心をもつようになると、いかにもトウェインらしく、興味の矛先は平凡な人の人生に向いていく。1906年3月26日には『自伝』に自分の輝かしい功績ではなく、普通の人の人生にもあるような、平凡な経験を取り上げる決心を述べている。ナラティブというのは普通の人が興味をもつようなものでなければならない。読者にとってなじみがあり、自分の人生を投影できるのはそういった平凡な出来事であるというわけである。人生で有名な人たちと接触したときのことばかりを書きたがる伝記作家に対しては「有名でない人との接触も同じように面白かったのに、それは読者にとってもそうであるのに、それに有名な人たちとの巡り会いよりずっと多いのに」と皮肉っている(441)。1905年6月ニューハンプシャー州のダブリンで『自伝』を口述していたときも、古い手紙の束から新たな題材を探しているうちに「身分が高くても低くても、金持ちでも貧しくても、有名でもそうでなくても、すべての人たちの喜びと悲しみがかけがえのないものとなった。以前はそんなことはなかったのだが、彼らの心の中の出来事を自分の心で受け止めることができるようになった」と感想をもらしている(*Fables of Man* 14)。

1905年頃のトウェイン自身の様子を最もよく反映していると思われる作品「落伍者」には、これに呼応した部分がある。この作品には全人類の父アダムの子孫を救済する計画を提案するジョージ・スターリング(George Sterling)という若い画家が登場する。ストームフィールド(Stormfield)提督の住む避難所に居候している彼は人生に失敗してそこに流れ着いてきた落伍者の一人一人の心の中を知るに連れて、以前はつまらないとしか思えなかった平凡な人たちの心に共感し、その面白さを実感するようになるのだ。この時期トウェインは以前書いた「アダムの日記」を読み直し修正を加えているが、これは全人類の父アダ

ムの記念碑を計画するジョージと相通ずる人間をいとおしむ気持ちの現われであろう。

トウェインはモリス事件の経過をずっと観察しているうちに、内容だけではなく、言葉についても大事な発見をしている。つまらない内容だと思いつつも、それに関する記事を読んだ彼はその言葉の力に驚嘆するのである。何年先になるかわからないが、それを読む人がいた場合の実験としてモリス事件の記事そのものを『自伝』に挿入し、次のように指摘する。取るに足りない内容だが、現在我々が使っている極めて自然な言葉で語られており、このような言葉で語られているものはたとえ100年先に読まれても、我々が今感じているのと同じ強い関心を惹きつける力があるだろう、と。そして、この記事がニュースとすれば、歴史の言葉と対比させて次のように説明する。もし、その事件が50年前に起きていて、歴史家が発掘して彼の言葉で意見を加えて記述すれば、それは歴史であって、読者の興味はたちまち冷めてしまう。歴史は読者の強い関心を引きつけるという点ではニュースに太刀打ちができない。実際に異常な事件を目撃した人がそれをナラティブの形にするとそれはニュースで、そこに反映される強い関心は永遠に残り、そのエピソードは時間がたつても風化することはないのだ、というのである。

トウェインは1867年に自分が新聞の記事を書いていた頃の記憶を語り出す。ある記事の取材のために米国議会図書館司書の友人を訪ねた彼はその目的の資料ではなく、別の記事に釘付けになってしまった。それは59年前にある紳士によって書かれたもので、彼は英国軍が首都を焼き尽くした事件を目撃し、そのことが鮮やかに頭に残っている状態で自分が普段使っている言葉を使って綴ったものであった。その記事にトウェインは強く引きつけられ、興奮し、自分の任務も忘れて読むことに没頭してしまっただけという。

考えてみればトウェインは若い頃から、このような生き生きと内容を伝える力のある言葉を、常に意識して作品に取り入れようとしてきた。彼が日記と自伝を一緒にした形で『自伝』を書くことに決めていたのは、

まだ内容の面白さが鮮明に頭に残っており、興奮が消えないうちにしか語れない迫力のある言葉に執着したからなのである。彼はかつて作品に書こうと思った要点をノートに記録し、あとで思い出しながら再現しようと試みたことがあったがうまくいかなかった。しばらく使わないで放置しておく効力を失ってしまい、それを読んで興奮したりインスピレーションを得たりすることはなかったのである（283）。そのときの興奮が伝わってくるような力のある言葉で語ってこそ、思わぬ過去の記憶を呼び覚ます連想の連鎖も可能だったのであろう。

#### 4. 結 び

トウェインは口述を本格的に始める10年ほど前、“How to Tell a Story”（1895）の中で、ユーモラスな話とは好きなようにあちらこちら彷徨いながら特に結末を気にしないで語るものだと述べている。そして、それは断固とした芸術作品で高度で繊細な技を要し、名人でなければ語れない、それにその語りの芸はアメリカのものだと述べている。トウェイン自身、語りのユーモアの名手であり19世紀半ばから後半に活躍した文学的コメディアンの一りであったのは有名である。フロンティアユーモアの語りの息づかいをそのまま残した短編“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County”や“His Grandfather’s Old Ram”、ネバダの山中で聞いたジム・ギリスの語りの妙をそのまま再現しようとした“Tom Quarts”や“What Stumped the Bluejay”なども書き残している。

トウェインの内面に蓄積された膨大な知識や経験を外に放出させることを可能にしたのは、やはりこのリズムだったのであろう。彼は35年間の試行錯誤の結果やっとそのことを突き止め、『自伝』を完成させることができたのである。新版『自伝』に彼はそのリズム、つまりインスピレーションを得、その連想から糸を紡ぐように語るそのリズムそのものを流し込もうとした。結局、新版『自伝』は彼自身の語る「語りのユーモア」の集大成だったと言えるのである。エピソードごとに分断してしまった

これまでの『自伝』はトウェインが苦勞して残そうとしたその技を完全に無視してしまうことであつたと言わざるを得ない。

新版『自伝』（全3巻）のうち現在既刊は1巻のみだが、今後これまでさまざまな版で読まれてきたトウェインの『自伝』研究、あるいはいまだに誤解の多い晩年の研究に新たな発展を期待できるだろう。ナイダー版『自伝』に親しんできた読者は、本稿で述べた点以外にもさまざまな視点から、これまでとの解釈の違いを発見することが可能だろう。また、新版『自伝』を日本に紹介する際には、アメリカ特有のユーモラスな語り の妙をいかに表現するかが大きな課題となるに違いない。

新版『自伝』を開けば、ベッドに横たわり、ほぼ毎日2時間の口述を続けるトウェインがいる。100年以上も残ることを想定に選び抜かれた言葉で語られたエピソードに、現代の我々は耳を傾け、そのユーモアを満喫することができるのだ。『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』（*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, 1899）で、主人公ハンクは自分の中にあるオリジナルなものは、針の先で隠れてしまう程度のもものかもしれないし、微細なアトムのようなものかもしれないが、そのオリジナルなもの、その本当に自分であるものを大事にしたいと語っている（第18章）。その後もトウェインは複数の作品の中で、たとえば自分の一部であっても永遠に残ってほしいという願望、あるいはその裏返しの表現である自分が完全に消滅してしまう恐怖に言及している（『細菌ハックの冒険』第6章）。永遠に残るといふ彼の願望は、みごとに達成されたことになるだろう。我々は新版『自伝』に、等身大のトウェインの姿を見出すことができるのだから。

（注）

- (1) 1906年から1907年に“Chapters from My Autobiography”として一部を*North American Review*誌に発表。1990年にMichael J. Kiskisが*Mark Twain's Own Autobiography: The Chapters from the North American Review*として出版。
- (2) ナイダー版『自伝』でトウィッチェルが描写されるのは42章、54章、56章のみである。

（参考文献）

Le Guin, Ursula K. “The Question I Get Asked Most Often.” *The Wave in the Mind*.

- Boston: Shambhala, 2004.
- Twain, Mark [Samuel Langhorne Clemens]. *Autobiography of Mark Twain*. Vol. 1. Ed. Harriet Elinor Smith, et al. Berkeley: U of California P, 2010.
- . *The Autobiography of Mark Twain. Including Chapters Now Published for the First Time*. Ed. Charles Neider. New York: Harper, 1959.
- . *The Bible According to Mark Twain*. Ed. Howard G. Baetzhold and Joseph B. McCullough. New York: Simon and Schuster, 1996. 189–94.
- . “The Refuge of the Derelicts.” *Mark Twain’s Fables of Man*. Ed. John S. Tuckey. Berkeley: U of California P, 1972. 157–248.
- . *What Is Man? and Other Philosophical Writings*. Ed. Paul Baender. Berkeley: U of California P, 1973.
- Twain, Mark and William Dean Howells. *Mark Twain-Howells Letters: Correspondence of Samuel Clemens and William D. Howells, 1872–1910*. Ed. Henry Hash Smith and William M. Gibson. Cambridge: Harvard UP, 1960.
- 渡辺利夫「“Genius is not enough” フランクリン『自伝』からマーク・トウエイン『自伝』まで」『マーク・トウエイン——研究と批評』第11号、日本マーク・トウエイン協会（南雲堂、2012年）14–23ページ。